

幼保小の架け橋のために

エビデンスからみる知恵と工夫



はじめに

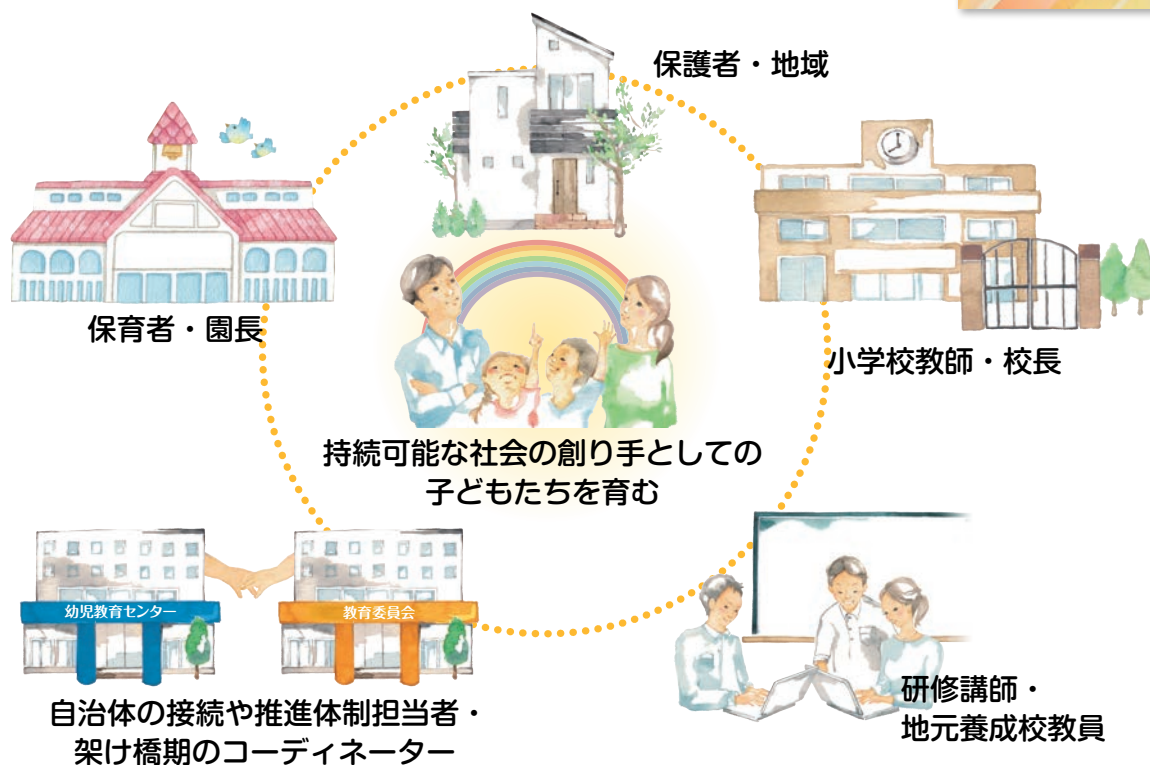
2022年春、文部科学省で架け橋プログラムが進められ、全国的に幼保小の接続期のカリキュラムや幼保小の連携体制の推進が図られています。このリーフレットでは、筆者らが5年間に収集したエビデンスに基づいて、幼保小の教育の質向上のための幼児教育推進体制を構築し、連携接続を進めるための知恵と工夫を紹介しています。ここで紹介する知恵と工夫は、幼保小連携接続に関わる多様な立場の方々（保育者、小学校教師、自治体の連携接続の担当者、移行期の子どもたちの保護者、研修講師）から得られたものです。

このリーフレットが関係者の皆様の幼保小連携接続や教育の質向上の一助となれば幸いです。

より詳しく研究についてお知りになりたい方は、
以下の図書をご参照ください。

マルチステークホルダーの視座からみる 保幼小連携接続—その効果と研修のあり方

一前春子・秋田喜代美・天野美和子 風間書房 2021年3月刊行



マルチステークホルダーから見る幼保小連携接続

マルチステークホルダーから見る幼保小連携接続とは、複数の（マルチ）関係者（ステークホルダー）が移行期の子どもたちの支援をすることを指します。ステークホルダーには、自治体の連携接続担当者、移行期の子どもたちの保護者、保育者、小学校教師以外に、養護教諭や学童保育指導員、学芸員、司書、中学校教師、調理師、PTAなども含まれます。

調査の概要

幼保小の連携接続研修に関する調査

P3

- 調査対象 日本全国の都道府県および市区町村の教育委員会（回答自治体数756）
- 調査方法 質問紙調査
- 調査時期 2019年11月～12月
- 調査内容 自治体が主催する幼保小の連携接続研修の機能、研修を開催するにあたって行った工夫など



保育者対象オンライン研修に関する調査

P6

- 調査対象 全国の幼児教育センターを設置もしくは設置準備中の都道府県及び市区町村の保育者を対象とする研修の担当者（回答自治体数97）
- 調査方法 質問紙調査
- 調査時期 2021年6月～7月
- 調査内容 オンライン研修実施の有無、オンライン研修を実施した理由、今後のオンライン研修実施の可能性など



幼保小連携接続の取り組みの効果に関する調査

P7

- 調査対象 関東地方の地方自治体の保育所・幼稚園・認定こども園において過去3年以内に5歳児クラスを担当した保育者125名、過去3年以内に小学校1年生を担当した小学校教師47名、保育所・幼稚園・認定こども園の5歳児クラスに在籍する幼児の保護者692名と小学校1年に在籍する児童の保護者700名
- 調査方法 質問紙調査
- 調査時期 2016年1月～2月
- 調査内容 幼保小連携接続の取り組みが子どもや自分自身に与える影響、幼保小連携接続の意義や課題など



幼保小連携接続研修の講師へのインタビュー調査

P11

- 調査対象 12名の幼保小連携接続研修の講師経験者（保育者としての実践経験のある大学教員4名、小学校教師としての実践経験がある大学教員4名、幼児教育を専門とする大学教員4名）
- 調査方法 オンラインビデオ会議システムを用いたインタビュー
- 調査時期 2020年7月～9月
- 調査内容 幼保小連携接続研修の講師の役割、印象に残っている自治体の取り組み内容、研修で伝えたいこと、担当者との事前打ち合わせの方法など

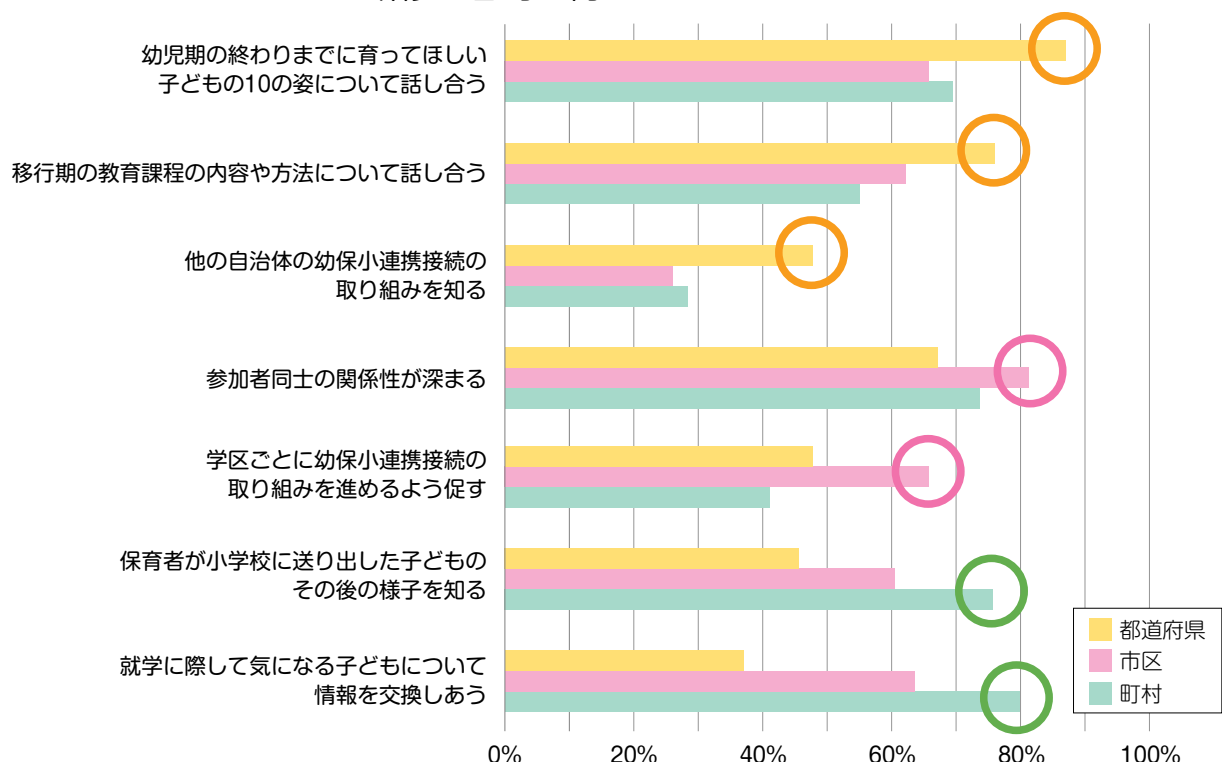


自治体の取り組み (PART1)

都道府県・市区・町村における幼保小の連携接続研修の機能の違い

- ◆ 自治体全体を通して、育ってほしい10の姿や教育課程に関する話し合いが研修の機能として大事にされています。
- ◆ 都道府県は、**教育課程についての話し合いや他自治体の取り組みを知る(○)**等を研修の機能としていました。このことから、全ての参加者が幼保小連携接続について共通の知識を得ることを研修に期待していると考えられます。研修の工夫への言及数は「参加者」に関する記述が最も多く、研修の工夫としても、**保育者・小学校教師がすべて参加の機会をもてるような工夫が必要**となっていると考えられます。
- ◆ 市区は**学区ごとの連携接続の取り組みを促進し、参加者の関係性を深める(○)**等を研修の機能としていました。このことから、幼保小連携接続の知識を持った参加者が、学区ごとのニーズをふまえた取り組みを話し合うことを研修に期待していると思われます。研修の工夫への言及数は「資料」に関する記述が最も多く、各園・小学校で実施されている**カリキュラムや交流活動に関する資料を準備し、「育ってほしい10の姿」等を基に学区内での話し合いが円滑に進むような工夫が必要**となっていると考えられます。
- ◆ 町村は**小学校での子どもの様子を保育者が知る、子どもについての情報を交換する(○)**等を研修の機能としていました。このことから、連携接続をしている保育者や小学校教師が子どもについての情報交換をすることを研修に期待していることが示唆されます。研修の工夫への言及数は「参加者」に関する記述が最も多く、**交流のある保育者と小学校教師が話し合いの場を持てる機会を作るという工夫が必要**になっていると考えられます。

Q 研修の目的は何でしょうか？





● 幼保小の連携接続研修の工夫の記述

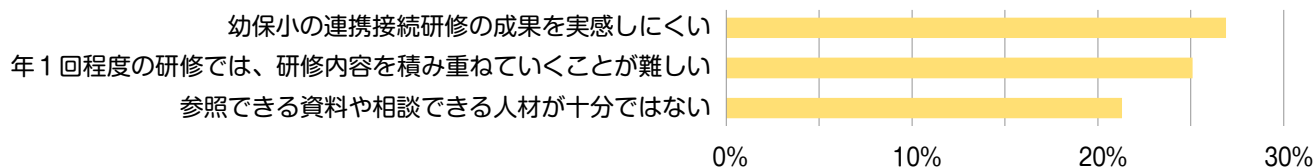
- ◆ 園と小学校の両者が集まる研修を実施しようとする、時間的な制約が大きく実施が難しいといった連携接続研修特有の課題があります。それを解決するために、時間に対する工夫（「時間を調整しやすい午後6時開始の「アフター5講座」という任意の研修をシリーズで実施している」等）や場所に対する工夫（「1回は県域全体を対象として県庁を会場に実施し、もう1回は特定の地方圏域を対象としてサテライト型で実施」等）が試みられていました。

研修実施体制	・学校教育課主催の「教務主任研修会」と子ども未来課主催の「主任保育士研修会」を同日に企画し、それぞれの前半部分を合同の研修会をしている。後半はそれぞれの研修を行っている。[町村] ・幼児教育アドバイザーと意見交換をし、研修内容や研修資料を作成している。[都道府県]
参加者	・1回は県域全体を対象として県庁を会場に実施し、もう1回は同じ内容で県内の特定の地方圏域を対象としてサテライト型で実施している。[都道府県] ・少しでも多くの幼・保・こ（※こども園）・小の職員が参加できるよう、時間を調整しやすい午後6時開始の「アフター5講座」という任意の研修をシリーズで実施している。[市区]
幼保小連携接続研修の講師	・研修の前後に各園・学校を講師と共に訪問し、実地での相談、指導にも対応するようにしている。[町村] ・就学前担当、小学校担当の指導主事が、それぞれの立場から連携接続の重要性や必要性、相互理解の大切さなどを就学前・小学校双方の参加者に伝えている。[都道府県]
開催の形態	・「5歳児担当と1年生担任」、「昨年度5歳児担当と1年生担任」と分けて研修会を実施した。[市区] ・研修の1コマ目に園（学校）への保育参観（研究授業）を行ったうえで、2コマ目に講話、3コマ目に園への助言などを行っている。[町村]
テーマ	・各研修の中で、家庭教育支援事業の情報を提供している。[都道府県] ・地区別の接続研では、「秋」というテーマにしぼって事例を持ち寄ることで、子どもの姿や指導者の働きかけの相違点を協議できるようにした。[都道府県]
話し合い	・保育参観を小学校教師がする際には、参観の視点を示し、指導主事や幼稚園教諭がとなりで説明した。[市区] ・幼保小中の教員がまじり合ってグループとなり、支援学校の教員とともに支援が必要な子どもについて、指導方法・方針について検討を行っている。[町村]
資料	・年度末に研究記録冊子を作成している。[町村] ・各学校・園同士で連携しやすいように「連携資料」を作成し、各校（園）に配布している（校長、園長名、コーディネーター名、連絡し易い時間などの情報を共有）。[市区]
意見の収集	・就学前教育に関わる者の研修については、日程、内容などアンケートで意向を聞く。[市区] ・アンケートを事前に行い、課題を整理し、協議の柱にすることができた。[市区]
継続実施	・連携接続のための研修も毎年回数を重ね、管理職向けの研修からシフトし、実際に子どもたちの指導にあたっている教諭等を対象とした研修を実施している。[市区]
連携接続の状況	・生活科授業研究会では、小学1年生の給食や清掃の様子も公開していただき、生活の様子を保育園・幼稚園の先生方に見ていただいている。[市区]



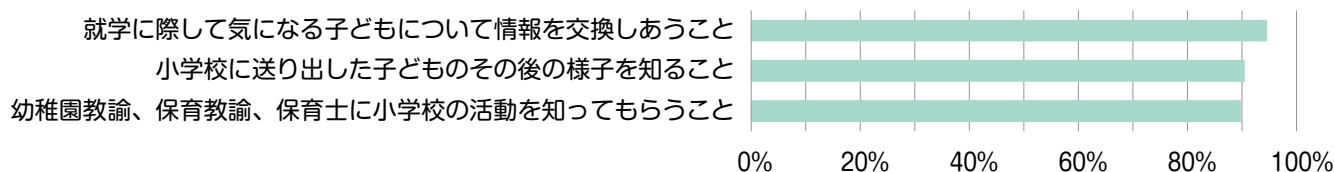
● 幼保小の連携接続研修の企画における課題（上位3位/複数回答可）

研修の企画者には研修で得た知識や経験が園と小学校における取り組みにどの程度反映されたのかわかる手段が少なく、その状態で次年度の研修の企画を立てざるを得ない状況となっています。



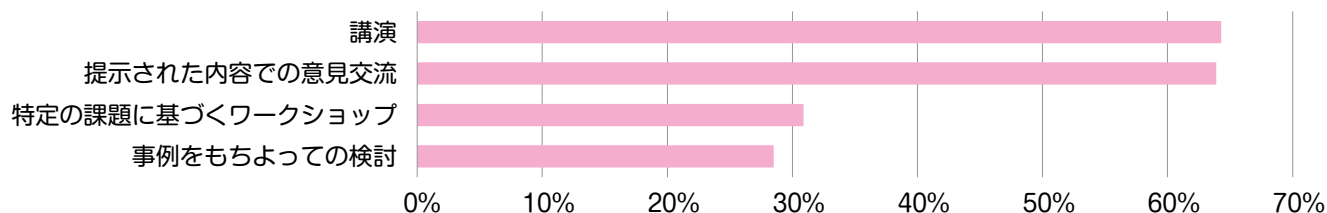
● 幼保小の連携接続研修の目的の達成度（上位3位/複数回答可）

連携接続の対象である園や小学校との情報交換や相互理解のための話し合いが研修の目的とされ、その目的はおおむね達成されています。研修は多忙のため日常的に会合を持つことが難しい園と小学校が話し合う貴重な機会として機能していといえます。

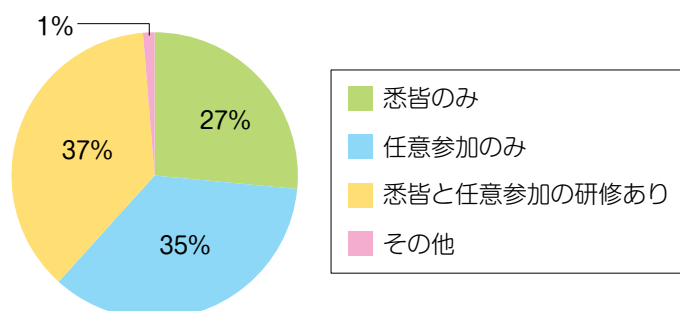


● 幼保小の連携接続研修の方法（複数回答可）

研修の方法として講演だけではなく、意見交換の機会が用意されていました。参加者は知識を得るだけではなく、意見交換を行うことで知識を深め、新たな視点に気づき、実践アイデアを得ることができます。参加者が自らの園や小学校の事例や検討課題をもちよって参加意識をもって取り組むことで、さらに研修の効果が高まることが期待されます。



● 幼保小の連携接続研修の参加形態

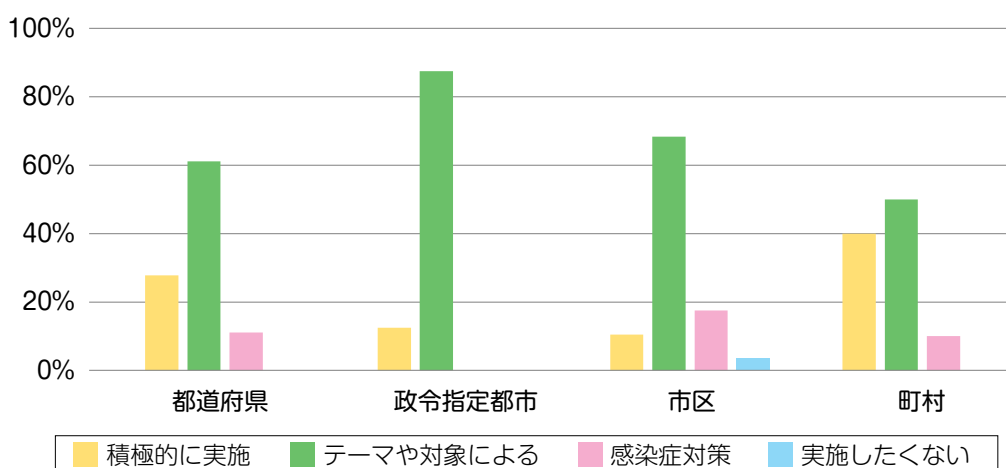


幼保小連携接続が移行期の子どもにとっての重要な支援であることが広く認知され、悉皆研修が増えてきているといえます。特別支援教育にかかわる保育者・小学校教師（特別支援教育コーディネーター等が想定される）など、できるだけ多様な関係者が研修に参加できる研修の増加が期待されます。



今後のオンライン研修の可能性

- ◆ 多くの自治体のオンライン研修は、オンラインでの研修を実施する体制を整える準備期間がない状態で始まりました。それにもかかわらず、今後も「**テーマや対象によっては実施したい**」と回答した自治体が最も多く、オンライン研修は感染症対策の手段としてのみではなく、研修の効果を高める一つの手段としても認識されていました。



オンライン研修実施の理由

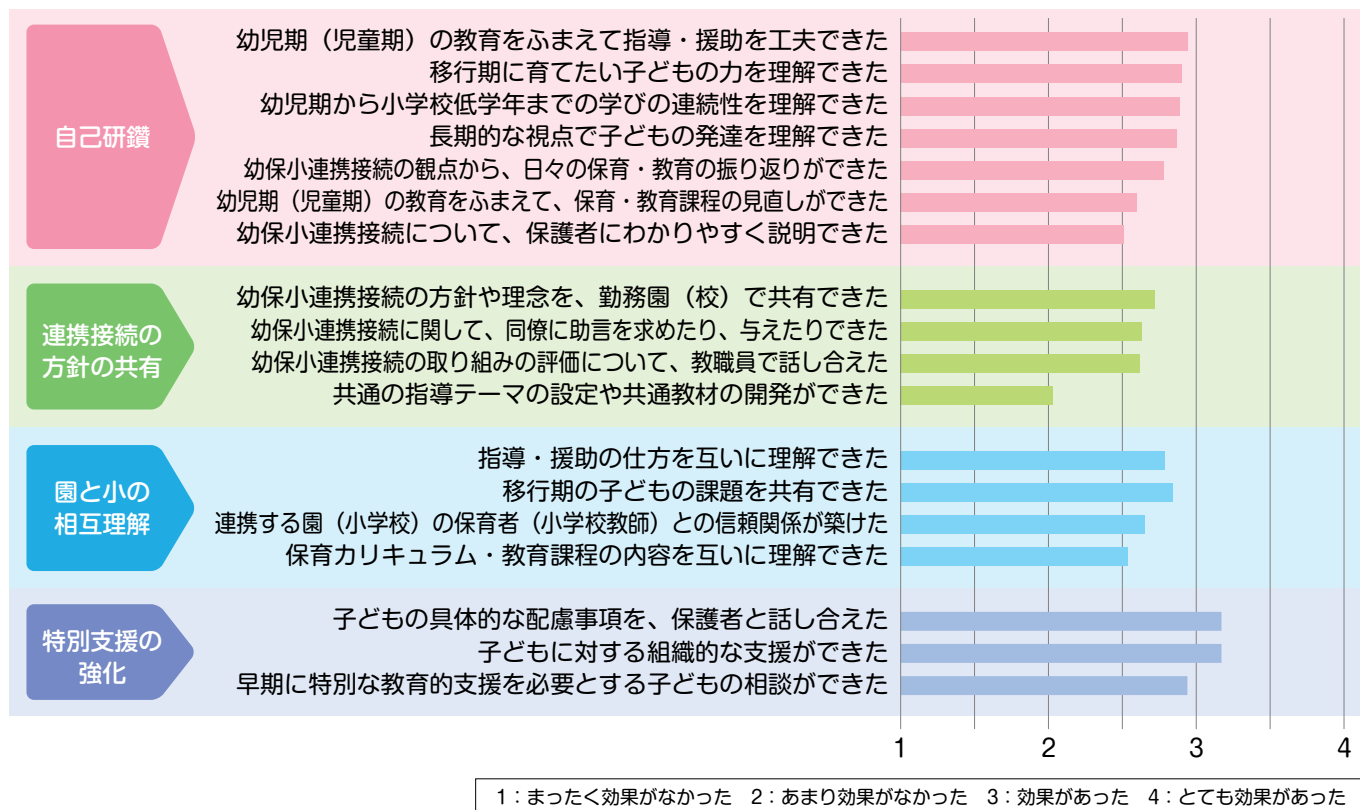
- ◆ 幼保小連携接続をテーマとした研修では、異なるタイムスケジュールで働いている保育者と小学校教師が同時刻同一場所に集まる必要があります。しかしながら、園と小学校の両者が集まる研修を実施しようとする、時間的な制約が大きく実施が難しいといった課題があります。自治体による幼保小の連携接続研修の工夫にもこの課題への対応策が含まれていました。それらに加えて、研修をオンライン形式で実施することも選択肢に入ってくると考えられます。オンライン研修の良さとして、以下のようなものが挙げられました。

研修後の効果を重視	複数名で一緒に受講でき、研修後に園・所内での協議もできる
研修中の効果を重視	リアルタイムで参加者が受講することで一体感と研修内容の共有ができる
研修機会の保障	可能な限り、タイムリーな研修を保障し、適宜、保育改善や園運営にいかせる
講師の招聘可能性	遠方の講師にもお話を伺える
多数の受講者が参加可能	以前から、研修参加者の人数が限られていることが課題であったため、オンライン型研修により、参加者の増加を目指した
受講者の負担軽減	受講者が時間、場所に制限されず、研修に参加できる
受講者の働きやすさ	教員の働き方改革につながる
視聴のしやすさ	受講者のタイミングで受講できる。また聞きのがした場面を見返すことができる
研修の準備と予算	研修実施日及び研修内容の変更に対応できる 全国の講師を交通費等の心配なく招聘できる



幼保小連携接続の取り組みが保育者・小学校教師の専門性に与える効果

- ◆ 幼保小連携接続の取り組みは、移行期の子どもへの支援であるのみならず、「自己研鑽」「連携の方針の共有」「園と小の相互理解」「特別支援の強化」という保育者や小学校教師の専門性を高める効果があることがわかりました。



保育者自身の変化

信頼関係の形成

園生活の中では、絵を描くことが苦手だった子が、就学支援シートの提出や、小学校教師との情報交換により、その子に合った対応をしてもらい、好きなキャラクターの絵や似顔絵を描いて届けに来てくれた時は、とても嬉しかった。同時に、一人ひとりに合った対応をもらい、成長を感じられる事ができ、改めて連携ができてよかったと思った。

保護者への情報公開

保護者からの就学についての不安など相談を受けた際にも、今までは、具体的なイメージを私自身もっていなかったところもあったが、見通しをもって、アドバイスや話をする事が少しずつできるようになった。

実践の改善

小学校生活に向けて、子どもたちが自信を持っていけるように保育にも当たれた。反面、小学校へ行くための保育にならないようにも配慮した。

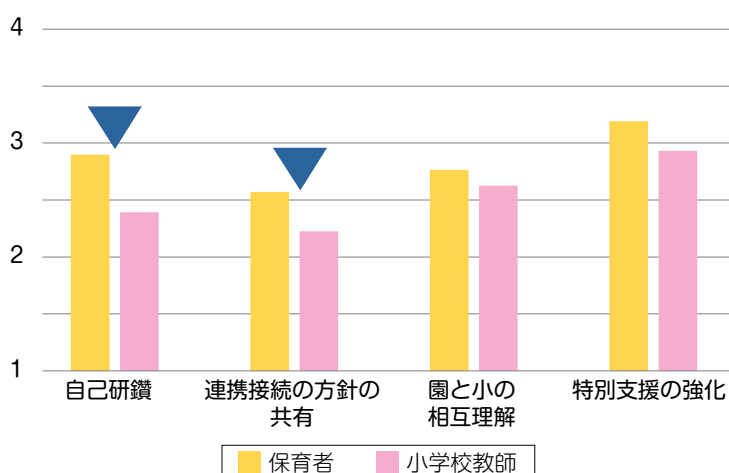
振り返りと学び

講演会を聞いた後、小学校の先生方との協議会に参加し、1年生の様子（つまりしていること、できていること、保護者の姿や意見）の話を聞いたことで、園で積み重ねておくべきことや、年長児に自信をつけさせておくべきことがわかった。



幼保小連携接続の取り組みが保育者・小学校教師の専門性に与える効果

- ◆「自己研鑽」(▼)と「連携接続の方針の共有」(▼)において保育者は小学校教師よりも効果を高く認識していました。保育者と小学校教師の間に効果の認識に違いがあることがわかります。
- ◆ 保育所・幼稚園・認定こども園は、小学校入学時の子どもの姿に向かって子どもの育ちを援助するという志向が強く、その意識が共有され、実践としても十分になされたという認識が保育者にあることが考えられます。
- ◆ 小学校教師は小学校1学年に入学した児童に対して生活や授業の中で配慮を行っており、その実践は自身の専門性を高める営みであるにもかかわらず、その内容を幼保小連携接続としては認識していない可能性があります。今後さらに架け橋期に小学校の先生方の参加が求められます。



1：まったく効果がなかった 2：あまり効果がなかった 3：効果があった 4：とても効果があった



小学校教師自身の変化

学びや課題の共有

入学前だけでなく、入学後しばらくたってから、幼稚園教諭、保育士から話をきけたことが良かった。小学校教師にとっては、幼保時代より成長していることがわかり、それまでの実践を振り返ることができた。また、未だ学校生活では見せていないその子の良さをすることもでき、学校でも良い面を伸ばしてやりたいと今後の指導のあり方を見直すきっかけとなった。

実践の改善

入学前の子どもの小学校生活に対する不安を軽減するばかりでなく、小学生にとっても、わかりやすく伝える工夫を考えたり、思いやりの気持ちを育むきっかけになったことを実感した。

実践の改善

幼保は、保育者が常に一緒にいることがわかり、小学校1年生からは、少しずつ子どもから離れて、子どもだけでできることが増えていくことがわかった。

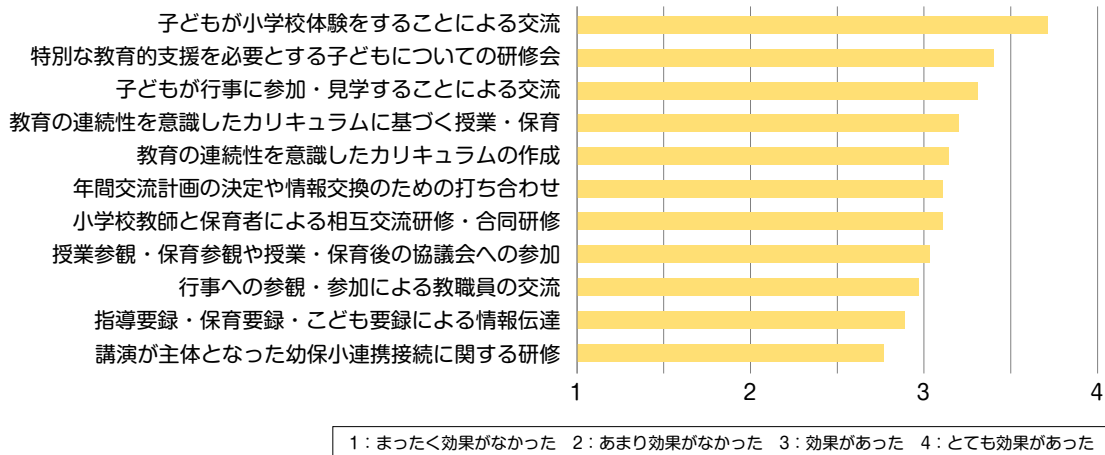
振り返りと学び

園の運動会の予行を見学させていただいたが、小学校の運動会の規模の大きさから、入学2か月目の1年生がどんなに頑張ったかが分かり、「もっと、ほめてあげればよかった。」と反省した。



幼保小連携接続の取り組みが子どもに与える効果（保育者・小学校教師から）

- ◆「**小学校体験や行事の参加・見学**」については、子どもが異年齢の子どもとの関係性を築き、異なる環境の知識を得ることの効果が認識されたと考えられます。
- ◆「**連続性のある接続期カリキュラムに基づく保育・教育**」や「**特別支援教育についての研修会**」は、保育者や小学校教師が教育の連続性に配慮した環境を用意したり、特別支援教育の方法や工夫について学んだりすることで、間接的に子どもが園から小学校へ円滑に移行する効果が得られたとの認識を保育者や小学校教師が持ったと推測されます。



子どもの行動の変化

保育者から

小学校への期待

小学校の見学と秋祭りの参加（教わりながら製作したり遊んだりする）、給食を食べる経験などさせていただくことで、幼児は「小学校は勉強、遊び、皆で同じ食事を楽しむなど、いろいろなことができる場である」ということを実体験し就学への期待が大きくもてた。

成長への見通し

子ども達も、しっかりしようという意識がめばえ、自分でいろいろなことを最後までやりとげようという気持ちへとつながっていた。

小学校教師から

異年齢との交友（幼児の立場から）

「5年生と年長児との、稲刈り体験や学校案内を行うことで、入学した際のきょうだい学年の児童同士となり、入学後、スムーズに活動に入れる。また、「知っているお兄さん、お姉さんがいる」と、安心感につながっている。

異年齢との交友（児童の立場から）

園児が来校し、1年生がどんぐりごまやマツボックリで作るツリーの作り方を教える交流があった。自分より年齢の低い園児に優しく接したり、上手に作っている園児や一生懸命やっている園児を、ほめたり、はげましたりするなど、気配りが見られるようになった。

保護者から

相手の立場に立つ

お兄さん、お姉さんとして、接して下さった小学生の姿を見て年中さんの前では特に、様々なルールを守ろうとする姿が見られるようになりました。

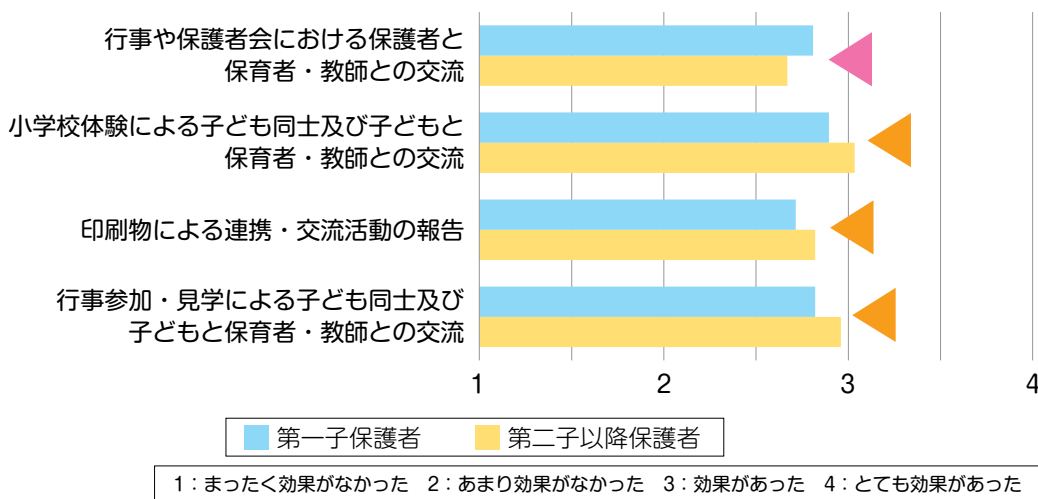
意欲の向上

小学校の学芸会を觀に、子どもたちを担任の先生が連れて行ってくれた。「1年生はすごい！」などと子どもが言って、様々な活動を頑張っており取り組むようになって良かった。



幼保小連携接続の取り組みが保護者に与える効果

- ◆ 第一子の保護者は、「**小学校の教師との交流**」(◀) が保護者に与える効果を高く認識していました。これに対して、第二子以降の保護者は第一子の保護者よりも「**行事の参加見学**」「**小学校体験**」「**印刷物等による連携・活動報告**」(◀) が保護者に与える効果をより高く認識していました。
- ◆ 「**小学校の教師との交流**」(◀) のような取り組みは、効果を認識するために保護者に特別な知識は必要ありません。第一子の保護者は知識を得ることができ不安を低減することができます。そのため、第一子の保護者が効果を高く認識したと考えられます。
- ◆ 「**行事の参加見学**」(◀) などは、連携接続の目的と内容を理解していないと効果の認識が難しい取り組みです。第二子以降の保護者は知識と経験をもっていることから、第一子保護者には適切に判断できないような効果も認識できたと考えられます。



保護者自身の変化

子どもの実態の認識

小学校1年生と交流した時に「小学生=しっかりした者」と思っていたので、実際、体験の様子を見学した時に、ほのぼのとマイペースな1年生を見て、可愛らしくて安心した。我が子もマイペースなので、「1年生としてやっていけるか」と、不安に感じていたが、まだまだ同じ様に成長の途中なんだなと気持ち became 楽になった。

専門家への信頼

小学校の校長先生が幼稚園で講演をして下さり、幼稚園の先生方と同様に親しく質問に答えてくださったので、幼稚園と同様の先生の保護者に対する距離感にとっても安心しました。具体的なお話の内容よりも「何か困った時には、いつでも声をかけて下さい」というお言葉が一番ほっとしました。

移行の準備

幼保小連携接続があることにより、予め、小学校入学後の生活を意識するようになった。結果、親が小学校に向けて考えるようになり、自ら情報収集するようになった。

子どもへの接し方

年長3学期になり、幼稚園でも入学準備に向けて、「決められた時間内に終わらせる」等、`小学生になる、ということ`を子どもに意識させていただいているので、親としても「幼稚園でもそうでしょ」と子どもに伝えやすくなったと思います。

幼保小の連携継続研修に関わる講師の声

研修での工夫や心がけていること

- ◆ 小学校の生活科の先生方の研修と幼稚園の先生の10年経験者研修と一緒に実施している。
- ◆ 異校種間でコラボするためにも、指導主事同士が仲良くやりながら相手側の教育のことを理解できるような仕組みをつくることを心がけている。
- ◆ 研修で話をする時は、自分は幼児教育側にいる立場なので、小学校の先生方に対する敬意を示して小学校の教育や先生方の良さを語ることが心がけている。

大学教員で
保育者経験あり



A先生

大学教員で
保育者経験あり



B先生

- ◆ 小学校の先生が1年生の入門期をどう見るかとか、どのような課題があるかなどを皆で出し合い、幼保小の接点になりそうなところから話し合う。
- ◆ 講演では具体的な子どもの姿を例示しながら、10の姿の視点について話している。
- ◆ ある自治体の研修計画作成の際には、一年で5回連続の幼保小連携継続がテーマの研修を行い、幼稚園と同じ学区の幼保小の先生が1名ずつペアになって同じ地区の園や学校の保育や授業を見るところをやっている。同じ地区であることの連携のしやすさもあると思う。

大学教員で
保育者経験あり



C先生

- ◆ 幼児教育は小学校に入学するために何か特別な準備をしなくちゃいけないと思っている保育者も多いが、小学校でやるような学習ではなく、園での日常生活にこそじっくり関わることが大切であるということを伝えるように意識している。
- ◆ 小学校の校長や園の園長などトップ同士がつながっていることが接続をスムーズにするとと思う。
- ◆ 幼児教育と小学校の生活科の授業とはつながやすいと思う。生活科の教科書は、とても内容が充実しているので幼児教育側にも学んでもらえるように心がけている。

大学教員で
保育者経験あり



D先生

- ◆ 研修や研究会で互いの教育・保育の実践を見るときに、教師や保育者の記録を取るのではなく、子どもが環境とどう関わっていたかとか、どんな学びをしていたかというような子どもの記録を取り、それを1枚の記録用紙にまとめて発表してもらっている。
- ◆ 保育マップ型記録という記録方法を取り入れている。保育では、子どもたちが園のあちこちで同時多発的にいろいろな遊びをしているため、鳥瞰図のようなマップにして保育全体を俯瞰して捉えてもらう。
- ◆ 小学校の算数の授業映像を見て、10の姿がどうつながっているのかを考えるワークをしている。



大学教員で
小学校教師経験あり



E先生

- ◆ 小学校の先生にスタートカリキュラムについて研修する時には、小学校1年生4月の算数の45分間の授業を一緒に作ってもらうというワークをしている。これは、なかなか好評！
- ◆ 国語の教科書にある『おおきなかぶ』の大きなかぶを小学校の教師と一緒に製作するワークをすると、幼児教育の考え方が伝わりやすかった。
- ◆ 幼保小の交流活動をした時には、その活動の写真や映像を残して、その活動を通して先生たちが学んだことをA4で1枚くらいにまとめて写真と一緒にファイリングしておくように伝えている。

大学教員で
小学校教師経験あり



F先生

- ◆ グループでディスカッションするときは、できるだけ幼児教育関係者と小学校関係者を混合して交流できるようにしている。
- ◆ 小学校低学年の子どもたちがどんな風に学んでいくのか、さらにそれが中学年、高学年、さらには中学校、高等学校にどうつながっていくのかを伝えることが私が伝えられる強みでもあるので積極的に伝えるようにしている。
- ◆ いろいろな幼保小連携接続の具体的な取組事例や、生活科の授業での取り組みなどの事例や映像を用いながら紹介している。

大学教員で
小学校教師経験あり



G先生

- ◆ 県が主催する幼保推進の協議会などでも公立だけではなく民営の保育所や私立幼稚園や幼保連携型認定こども園の代表者にも入ってもらうようにしている。
- ◆ 幼保小連携接続を誰かがしてくれるのを待つのではなく、保育者が積極的に行動していくことが大事であることや、自分たちの保育を自信をもって語れるようにしていくことの必要性を伝えるようにしている。
- ◆ 幼保小の相互理解を深めるために、半年以上の時間をかけて幼児や児童の姿を通して考えるために集まって話し合いをした。

大学教員で
小学校教師経験あり



H先生

- ◆ ワークショップでは、小学校入学期の子どもへの戸惑いに着目して学び合うために考案されたワークショップツールである「とまどいマトリクス」を活用した研修を行っている。
- ◆ 研修の際に、小学校の国語や算数、音楽などの教科書の内容を実際に園の先生方にお見せしながら、園での活動とつながりがあることをお伝えしている。
- ◆ 大きなホールでの講演による研修でも、参加者にはペアでワークをしてもらっている。その際、同じ園の仲間同士や、保育者同士などではなく、できるだけ異なる園や学校の先生とペアになってもらうように事前に伝えてるようにしている。



- ◆ 研修の中で、幼保小間で交流活動をしている子どもの様子や表情が写っている写真をお見せして、視覚的に捉えて考えることができるようにしている。
- ◆ 交流活動で同じことをやっても、小学生と幼児の姿では違いがあるので、そのズレが見えやすい写真を選んで研修に取り入れるようにしている。
- ◆ ある市では小学校に上がっていく子どもの保護者向けに、小学校がどんなところか、どんな準備が必要かなどをまとめたリーフレットがつけられているので、研修の中でも取り上げて紹介している。

大学教員



I先生

大学教員



J先生

- ◆ 特に幼保小の連携接続研修の場合には、どのような立場の人がどのくらいの割合で参加するのかによっても研修で話す内容を変えるようにしている。基本となる内容は同じだが、どこに焦点を当てた話にするかを受講者に合わせて変えている。
- ◆ 私の研修では、幼保小連携接続の一番大事なポイントを受講者に理解してもらい、それを他に伝えてもらうということを特に意識している。
- ◆ 市や県で幼保小連携接続のための資料やカリキュラムを作ったら、それらの資料を読み解きつつ、現場の声を発表してもらったり、話し合ってもらったりしている。

大学教員



K先生

- ◆ ワークショップのような感じで、幼稚園の先生がアプローチカリキュラム、小学校の先生がスタートカリキュラムを持ち寄ってカリキュラムの改善について話し合う研修をしている。
- ◆ 小学校の先生が参加される研修では、保育では子どもは遊びを通して学んでいるということについて動画や写真、エピソードを用いて丁寧に伝えている。
- ◆ 園の子どもたちが通うことになるいろいろな小学校を「小学校マップ」のようにして作って掲示板に貼り、いつでも子どもたちが見れるようにしている実践事例などを提案している。

大学教員



L先生

- ◆ 幼保小連携接続に関わる保護者支援について、「伝える、支える、守る」という3段階で説明し、特別な支援が必要なケースでは各関係機関とつなげることの必要性について伝えている。
- ◆ 公開保育でいろんな園や小学校の先生が参加される時に、小学校の先生に子どもの遊んでいる姿を解説して、子どもがどんな経験をしているのか等を伝えている。
- ◆ 行事のように一方的に訪問する「交流活動」ではなく、小学校の校長先生に「どこか困っている学年やクラスはありますか？」という問いかけから始めて、そのクラスや子どもが活きるように一緒に頑張りましょうと声をかけて進めている。

🌸 今後の幼保小連携接続に向けて

自治体レベルでの幼保小連携接続の意義

幼保小連携接続において自治体が重要なのは、自治体を中心となることによって各自治体の独自性をいかした架け橋期のカリキュラムをもとにした幼保小連携接続の持続可能性が高まることが期待できるためです。自治体レベルで連携接続を支援することで、継続的な公開保育・授業や、複数回の研修の実施など園や小学校という単位では継続的な実施が難しい取り組みを実施することが可能となります。

マルチステークホルダーによる連携のネットワークづくり

移行期に関与するステークホルダーには、養護教諭、特別支援学級や特別支援学校教員、学童保育指導員、学芸員、司書、中学校教師、調理師、PTAなどが含まれます。たとえば、養護教諭や支援学級（学校）教員が加わることで、園と小学校での特別支援教育を長期的なスパンで計画することができます。学童保育指導員が加わることで、学童クラブを参考に子どもにとって居心地のよい環境を保育者や小学校教師が学ぶことができます。学芸員や司書が加わることで、園と小学校の交流を美術館や図書館で実施するなど、地域の中でつながることができます。このようにマルチステークホルダーが関与することにより、ステークホルダー自身も地域文化を知ることができ、子どもは多様性をもつ環境の中で育つこととなります。また、今後は地域での教育と福祉のつながりも重要になっていきます。

ICTと連携接続ネットワークづくり

今後は、オンラインを通じた連携接続の取り組みも期待されます。連携接続の取り組みを時間割に組み込むことは難しくても、子どもが先生にメッセージを送り、先生は空き時間にそのメッセージを読んで返事をするなどのやりとりができます。また、幼児と児童が休み時間にオンラインで会話することもできます。加えて、地域の小学校の教員の紹介や教室・体育館などの環境の説明もオンラインで画像や動画で伝えることもできます。さらに、園内・校内研修や相互に公開参観して対話するなどオンライン上で実施することで行いやすくなることが考えられます。

架け橋をつなぐために

架け橋期のカリキュラムと教育方法の手引きや資料の普及・それらに基づく実践と改善を進めていくにあたり、教育委員会指導主事、幼児教育アドバイザー、架け橋期のコーディネーターの役割が重要になります。指導主事は、手引きの内容を誰にどのように伝えることが普及に寄与するのかを考え、普及を推進します。幼児教育アドバイザーは、手引きや資料（共通要素）をもとに、園や小学校の特徴をふまえた発展的なアドバイスを行います。架け橋期のコーディネーターは、園—小学校、幼保小—関連機関（大学等）、幼保小—家庭・地域の間をつなぎながら助言を行います。





幼保小の架け橋のために

エビデンスからみる知恵と工夫

2022年3月31日発行

リーフレット作成 一前 春子（共立女子短期大学）
秋田 喜代美（学習院大学）
天野 美和子（東京大学）

JSPS科学研究費基盤研究（C）課題番号 19K02664

「地方自治体主催の研修への参加が保幼小連携パートナーシップ形成に及ぼす影響」

ご協力いただいた関係者各位に御礼申し上げます。

———当リーフレットの内容、テキスト、画像等の無断転載・無断使用を固く禁じます。———